

佳作

私のつなげる、やさしさ

小松崎 有美さん

当たり前前に妊娠して、普通に出産して、母親になるものだと思っていた。そんな私の話である。私は二年前、待望の第一子を身ごもった。はじめてもらう母子手帳。それはわが子を抱くと同じくらい嬉しかったのを覚えている。しかし、妊婦健診でのこと。私の血液型はA B型のRH（－）ということがわかった。これは二千人に一人と言われているらしい。医師は「ちょっとしたハイリスクでね」とRH式血液型不適合の説明をしてくれた。それでもやはり不安で家に帰ってもそのリスクを調べた。家族からの輸血はできず、また他の血液提供者も少ないという。つまり、手術の際には血液の確保が難しいということだ。調べるほどに様々な情報の渦に巻き込まれそうになる。不安で胸がつぶれそうになるのを「これはあくまで帝王切開の場合。自然分娩なら輸血の必要もない」と言い聞かせた。

しかし23週で前置胎盤だと言われ、そのまま治ることもなく27週で警告出血。診察後、大量出血が起きるかもしれないとすぐに入院となった。医師から帝王切開になるということを告げられ、目の前が真っ暗になった。一番恐れていたことが現実のものとなった。その夜、病院の電話から母に泣きながら手術のことを話した。母は「ふつうの子に生んであげられなくて悪かった」と声を震わせた。そんな母を前にしてそれ以上弱音は吐けなかった。本当は言いたかった。なんで私ばかりこんな目に遭うの。もう怖いよ。ちゃんと赤ちゃん産まれてくるの。頭ではそんなことが浮かんでくるのに言えずにいた。それは母を責めることになる気がしたからだった。

それから万が一の出血に備えて自己血をとることになった。一回貯血をすると血液内の鉄分がかなり失われる。そのため鉄剤をひたすら飲んで鉄分の復活を待つ。ただでさえ貧血持ちの私だ。三回目の貯血は見送られた。しかしこれでは手術に臨めない。いつ陣痛がきて、大量出血があるかもわからない。このままではまずい。私は焦っていた。もはや自分の描いていた出産と全く別の状況にどうしていいかわからなくなっていた。自然に産めない自分はおろか、血液さえも満足に採れない自分にも嫌気がさしていた。そんな焦りからか、私は問診に来た医師に聞いた。

「これでは足りないんですか」「鉄剤もつともらえませんか」

すると医師は私の顔を見てこう言った。「日赤にAB（－）のストックがあります。安心してください」その瞬間、張りつめていたものがスーッと消えていくの

を感じた。こうして私は無事に出産という大仕事を終えることができた。
あのときの子どもはいま二歳になった。あの出産を経て、私は「ヒトが産まれること」は決して当たり前でも普通のことでもないとわかった。そこには常にリスクがあり、前例のないことも、予想だにしないことだって起きる。そういう意味では本当に命がけだ。

あの不安な出産を思い出すたび、目の前のわが子を抱きしめたくなる。よく産まれてきてくれたね。怖い思いをさせてごめんね。お母さん、いっぱい泣いてごめんね。そんな言葉をかけたくなってしまう。同時に血液を提供してくれた人にも頭を下げたくなる気持ちでいっぱいだ。顔も年齢も性別もわからないが、ひとつだけわかることがある。それは「人のために役に立ちたい」という慈愛に満ちた人であるということ。私と子どもの命をつないでくれたこの恩人に面と向かってお礼を伝えられないのが残念でならなかった。

そんなことから、産後しばらく経ってから子どもを連れて献血ルームに行きはじめた。ここに通うのは命をつないでくれた方へのお礼のつもりだ。目に飛び込んでくる「AB型RHマイナス不足」の文字。今日もどこかでSOSを出している人がいる。不安に押しつぶされそうな人がいる。今日を生きたいと必死に願っている人がいる。

献血後やはり貧血気味になる。歳かな。もう無理かな。少し弱気になる。でもやさしさでつながる命がこれからも増えてほしい。だからまずは私自身が健康で、またここに来たいと思える。名前も知らない誰かを助けに。これが私なりの「つなげる、やさしさ」なのかもしれない。